



Title	校訂鬼谷子三卷訳稿（4）
Author(s)	高田，哲太郎
Citation	中国研究集刊. 2007, 44, p. 46-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61137
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

校訂鬼谷子三卷訳稿（4）

高田 哲太郎

卷下（後半）「本經陰符七術」（「養志法靈龜」章以下）、「持樞」、「中經」・鬼谷子佚文

本經陰符七術（続）

養志法靈龜¹⁴

養志者、心氣之思不達也¹⁵。有所欲、志存而思之。志者欲之使也。欲多則心散、心散則志衰。志衰則思不達也¹⁶。故心氣一、則欲不_レ困。欲不_レ困、則志意不衰、志意不衰、則思理達矣¹⁷。理達則和通、和通則亂氣不煩於胸中¹⁸。故內以養_レ志、外以知人。養志則心通矣、知人則職分明矣¹⁹。將欲用之於人、必先知其養氣志。知人氣盛衰而養其志氣、察其所安、以知其所能²⁰。志不養、則心氣不固。心氣不固、則思慮不達。思慮不達、則志意不實。志意不實、則應對不猛。應對不猛、則志失而心氣虛。志失而心氣虛、則喪

其神矣²¹。神喪則髣髴、髣髴則參會不一²²。養志之始、務在安己。己安則志意實堅。志意實堅、則威勢不分。神明常固守、乃能分之²³。

◎二字の「惶」、道藏本「惶」に作る。同義。◎「志」、道藏本「氣」に作る。嘉慶十年本に従って改める。◎「職分」、「志失」、道藏本「分職」、「失志」に作る。顛倒。嘉慶十年本に従って改める。◎「則」、「矣」、道藏本欠。嘉慶十年本に従って補う。

志を養ふは靈龜に法る

志を養ふは、心氣の思、達せざればなり。欲する所有れば、志は存して之を思ふ。志は欲の使なり。欲多ければ則

ち心散じ、心散ずれば則ち志衰へ、志衰ふれば則ち思、達せざるなり。故に心気一なれば、則ち欲、徨はず。欲、徨はざれば、則ち志意衰へず、志意衰へざれば、則ち思、理達す。理達すれば則ち和通し、和通すれば則ち乱気、胸中に煩ならず。故に内は以て志を養ひ、外は以て人を知る。志を養へば則ち心、通じ、人を知れば則ち職分、明らかなり。將に之を人に用ひんと欲すれば、必ず先づ其の氣志を養ふを知る。人氣の盛衰を知りて其の志氣を養ひ、其の安んずる所を察し、以て其の能くする所を知る。志、養はれざれば、則ち心氣、固からず。心氣、固からざれば、則ち志慮、達せず。思慮達せざれば、則ち志意、実ならず。志、則ち志、失はれて心氣虚し。志、失はれ心氣虚しければ、則ち其の神を喪ふ。神、喪はるれば、則ち髣髴たり。髣髴たれば則ち参会、一ならず。養志の始、務は己を安んずるに在り。己、安なれば則ち志意、実堅なり。志意実堅なれば、則ち威勢分たれず。神明にして常に固く守らば、乃ち能く之を分つ。

53

養志法靈龜（志）、意思を養うには靈龜に法る

「志」（意思）を養うというのは、「心氣の思」、心の中

で思っていることが、達成されないからである。欲するものがあれば、「志」は、それがあるものとして達成を思う。「志」は、欲望の使者である。従つて、欲が多ければ、心は集中できず散漫となり、心が散漫になれば、「志」は衰え、「志」が衰えれば、思いは達成されないことになる。それ故に、心氣、心の中の思いが、一つに集まつていれば、欲は彷徨することは無い。欲が彷徨しなければ、「志意」（意思）は衰えない。意思が衰えなければ、思いは道理上どうしたらそれを達成できるかをつかむ。道理上どうしたら達成できるかがわかれば、心は調和し、すっきりと外と通じ、調和し、すっきりと外と通ずるなら、乱氣、心のうちの乱れた氣持ちは、胸のうちで騒ぐことがなくなる。

それ故に、心の内では志を養い、心の外、現実では、人を知り、人のあり様があるがままに見るのである。志を養えば、心は然るべく外に通じて対応し、人を知り、人のあり様があるがままに見るならば、自らが現実にあつて何を為すべきかという具体的な立場、職分が明らかとなる。

この考え方を人に用いて、人を知ろうとするなら、必ず第一に、自らの意思氣力を養うということを知る事ができる。つまり、人の氣力の盛衰の状態を観察し、それ

を踏まえて自らの意思氣力を養い、自らが、こうだと安心できる立脚点を察知してつかみ取り、そこで自らができることは何かをつかみ取るのである。意思が養われなければ、心の中の思い、氣力は、確固たるものとはならない。心の中の思い、氣力が確固たるものでなければ、心の思い、思い描く構想は、こうだという確信に達することはない。心の思い、思い描く構想がこうだという確信に達しなければ、意思、氣力は実のあるものとはならず、本氣にはならない。意思、氣力が実のあるものとはならず、本氣にならないければ、「応対」、物事、人に対する対応は、勇猛、積極果敢とはならない。応対が、勇猛、積極果敢でなければ、意思は失われ、心の内の氣持ち、氣力は虚しいものとなる。意思が失われ、心の内の氣持ち、氣力が虚しいものとなれば、自らの「神」（上位自我、アイデンティティー）を喪失する。この「神」が喪われれば、醉生夢死のぼんやりした状態となる。ぼんやりした状態に陥るなら、「志」、「心」、「神」三者の有機的統一は失われる。

「志」を養うことの第一、始めは、自らを安らかな状態に置くことにその要点がある。自らが安定したあり方、欲、己にとらわれず、あるがままにあるならば、意思、氣力は堅実である。意思、氣力が堅実であれば、「威勢」

（現実に流されず、白を白として現実を改変しうる心のはたらき、影響力）は、分散しない。「神」が明らかに把握され、常に固くそのあり方を守るなら、やがて「威勢」を他に分散させ、推し及ぼすことができる。

53

14 志者、察是非。龜者、知吉凶。故曰、養志法靈龜。

15 言以心氣不達、故須養志以求道也。

16 此明縱欲者、不能養氣志。故所思不達也。

17 此明寡欲者、能養其志。故思理達矣。

18 和通則莫不調暢。故亂氣自消。

19 心通則一身泰、職明則天下平。

20 將欲用之於人、謂以養志之術用人也。養志、則氣盛、不養則氣衰。盛衰既形、則其所安、所能可知矣。然則善於養志者、**其**唯寡欲乎。

21 此明喪神、始於志不養也。

22 髣髴、不精明之貌。參會、謂志心神三者之交會也。神不精明、則多違錯。故參會不得其**一**也。

23 安者、謂欲而心安也。威勢既不分散、神明常來固守、如此則威積而勢震物也。上分、謂散亡也。下分、謂我有其威而能動彼。故曰、乃能分之也。

實意法臘蛇²⁴

實意者、氣之慮也²⁵。心欲安靜、慮欲深遠。心安靜則神策生、慮深遠、則計謀成。神策生、則志不可亂。計謀成、則功不可間²⁶。意慮定則心遂安。心遂安、則所行不錯。神自得矣。得則凝²⁷。識氣寄、姦邪得而倚之、詐謀得而惑之、言無由心矣²⁸。故信心術、守真一而不化、待人意之交會、聽之、候之也²⁹。計謀者、存亡之樞機。慮不會、則聽不審矣。候之不得、計謀失矣、則意無所信、虛而無實³⁰。故計謀之慮、務在實意。實意必從心術始³¹。無爲而求安靜五臟、和通六腑、精神魂魄固守不動、乃能內視、反聽、定志、慮之太虛、待神往來³²。以觀天地開闢、知萬物所造化、見陰陽之終始、原人事之政理、不出戶而知天下、不窺牖而見天道、不見而命、不行而至³³。是謂道知、以通神明、應於無方而神宿矣³⁴。

54

◎二箇所の「策生」、道藏本「明榮」に作る。嘉慶十年本に従つて改める。◎「心遂安」、「自」、「得」、「之」道藏本欠。嘉慶十年本に従つて補う。◎「故計謀之慮、務在實

意。實意必從心術始³¹。」、道藏本、注に竄入。嘉慶十年本に従つて本文とする。◎「慮」、「太」、道藏本「思」、「大」に作る。嘉慶十年本に従つて改める。

意を實にするは臘蛇に法る

意を實にするとは、氣の慮なり。心は安靜を欲し、慮は深遠を欲す。心、安靜なれば則ち神策生じ、慮、深遠なれば則ち計謀成る。神策生ずれば、則ち志、乱すべからず。計謀成れば、則ち功、間するべからず。意慮定まれば、則ち心、遂に安なり。心、遂に安なれば、則ち行ふ所錯たず、神、自得す。得れば則ち凝る。識氣、寄なれば、姦邪、得て之に倚り、詐謀、得て之を惑はすは、言、心に由る無ければなり。故に心術を信じ、真一を守りて化せず、人の意慮の交會を待ち、之を聴き、之を候ふ。計謀は、存亡の樞機なり。慮、会せずんば、則ち聴、審ならず。之を候ふも得ず、計謀失はるるは、則ち意の信ずる所無く、虚にして実無ければなり。故に計謀の慮、務は意を實にするに在り。意を實にするは、必ず心術より始む。無爲にして五蔵を安靜にし、六腑を和通するを務め、精神魂魄、固守して動かざれば、乃ち能く内視、反聴、定志し、之を太虚に慮り、神の往來を待つ。以て

天地の開闢を觀て、萬物の造化せらるる所を知り、陰陽の終始を見て、人事の政理を原ぬれば、戸を出でずして天下を知り、牖^いより窺はずして天道を見、見ずして命じ、行かずして至る。是れ道知、以て神明に通じ、無方に応じて神、宿ると謂ふ。

54

実意法騰蛇（意思を實あるものにし確信するには騰蛇に法る）

意思を實にするとは、「氣」についての配慮である。心には安静が必要であり、思慮には深き遠きが必要である。心が安静であれば、「神策」（上位自我による判断、妥当性ある計画）が生じ、思慮が深く広ければ、計画は具体化する。心に神策が生じたなら、意思は乱すことができない。計画が具体化すれば、その功、成果は、隙を突くことはできない。意思、思慮が一定方向に定まれば、心は安らかである。心が安らかであれば、行うところに誤りはなく、「神」（上位自我）は自得し、自らを自らと位置づける。この状態を得れば、そのかたち、あり方として完成する。

「識氣」（その事に対する認識）が、寄、確信のない仮のものであれば、姦邪、邪な心がこれに取りつき、詐謀、偽りのばかりごとがその認識を惑わせるのは、認識して

いる言、ことばが、心に基くものを持たないからである（妥当性を持たない我見）。それ故、「心術」（己を越えた心よりして己を扱う方法を示すことば）を信じ、「真一」（「真人」として一を執るあり方。前出）を守り、我見に引かれてそのあり方を変化させず、相手の意思、思慮が心術に交々びつたり適うのを待ち、相手のことばを聴き、そのあり方を観察し、態度を窺う。計画というものは、生きるか死ぬかの存亡を決定する枢軸、具体的原点である。思慮が心術に適わなければ、聴いてもはつきりしない。相手を観察し、態度を窺っても、相応しいものが得られずに計画自体が失われるのは、こちらの意思に信ずるものがなく、「虚」、單なるエゴの空想、ことばだけであつて、「実」、己を越えた心、本来的なものに基く確信がないからである。

それ故に、計画についての思慮、考え、構想は、意思を實にするところにその要がある。意思を實にするには、必ず「心術」から始める。即ち、無為、己にとらわれず、五臓を安静にし、六腑が調和し滞ることのないようにし、精神（精鋭なる「神」、魂魄（「心」の前提、構成要素）が、固くその本来のあり方を守つて動かないならば、「内視」、自己観察し、「反聴」、前提をとらわれずに振り返り、自らの立場を聴き知り、「定志」、意思を一定方向に定めら

れるようになり、そのあり方を「太虚」、存在の大前提、ことばにより規定できないことばを生み出すものそのものに一体化し慮り、「神」（上位自我）が心に立ち現れ、太虚と自らの心を往来し活動するのを待つようになる。

そこで、天地の開闢、つまり存在の始まりがことばによるものであることを見抜き、万物が造化されるのはことばによるものであることを理解し、陰陽の終始、つまり是非、善悪、好悪の価値の展開を観察し、人事の政理、つまり人がどのように人を用い、用いられてゆくものかを考えてゆけば、戸を出でずにその世界を理解し、つまりその世界がそのことばによつて成立していることが自ずから理解され、窓から見なくても天道が見え、つまり他に根拠を求めなくとも自ずからその法則が理解され、他を見ずに主体的に物事を位置づけ、実際に関わらずとも言葉によつて等しい効果を得る。これを「道知」（言葉に対する理解）は「神明」（上位自我による妥当性ある判断）に通じ、無限に変化するかたちに対応し、「神」が宿る、と言うのである。

54

24 意[意]委曲。蛇能屈伸。故實意、法騰蛇也。

25 意實、則氣平。氣平則慮密。故曰、實意者、氣之慮。

26 智不可亂。故能成其計謀。功不可間、故能寧其邦國。

27 心安則物無爲而順理、不思而玄覽。故心之所不錯、神自得之。
[得]則無不成矣。凝者、成也。

28 寄、謂客寄。言[言]氣非真、但客寄耳。故茲邪得而倚之、詐謀得而惑之。如此則言皆智慮無復由心矣。

29 言心術誠明而不虧、眞一守固而不化。然後待人接物、彼必輸誠盡意。智者虛能、明者獻策。上下同心。故能謀慮交會也。用天下之耳聽、故物候可知矣。

30 計得則存、計失則亡。故曰、計謀者存亡之樞機。慮不合物、則聽者不爲己聽。[故]聽不審矣。聽既不審、候豈得哉。乖候而謀、非失而何。計既失矣。意何所信。惟有虛偏、無復誠實也。

31 實意則計謀得。故曰、務在實意。實意由於心安。故曰、必在心術始也。

32 言欲求安心之道必先寂澹無爲。如此則五臟安靜、六腑和通、精神魂魄各守所司、澹然不動、則可以內視無形、反聽無聲、志虛[志]太虚、至神明千萬、往來歸於己也。

33 唯神也、寂然不動、感而遂通天下之故、能知於不知、見於不

見。豈待出戶窺隔、然後知見哉。同於不見而命、不行而至也。

34 道、無思也。無爲也。然則道知者、豈用知而知哉。以其無知。故能通神明、應於無方而神來舍矣。宿猶舍也。

分威法伏熊³⁵

分威者、神之覆也³⁶。故靜意固志、神歸其舍、則威覆盛矣³⁷。威覆盛、則內實堅。內實堅、則莫當。莫當則能以分人之威而動其勢、如其天³⁸。以實取虛、以有取無、若以鎰稱銖³⁹。故動者必隨、唱者必和。撓其一指、觀其餘次、動變見形、無能間者⁴⁰。審於唱和、以間見間、動變明而威可分也⁴¹。將欲動變、必先養志、伏意以視間⁴²。知其固實者、自養也。讓己者、養人也。故神存兵亡、乃爲之形勢⁴³。

55

◎「意」、道藏本「固志」の下に有り。嘉慶十年本に従つて移す。◎「銖」、道藏本「珠」に作る。嘉慶十年本に従つて改める。◎「也」、道藏本欠。嘉慶十年本に従つて補う。

威を分つは伏熊に法る

威を分つ者は、神の覆なり。故に威を静にし志を固くし、神、其の舍に帰すれば、則ち威覆、盛なり。威覆盛

なれば、則ち内、實にして堅し。内、實にして堅ければ、則ち当る無し。当る莫くんば、則ち能く人に分つの威を以て其の勢を動かすこと其の天の如し。實を以て虚を取り、有を以て無を取ることに、鎰を以て銖を称るが若し。故に動かす者は必ず随ひ、唱ふる者は必ず和す。其の一指を撓めて其の餘次を觀、動變して形を見さば、能く間する者無し。唱和に審にして間を以て間に見さば、動變、明にして、威、分つべきなり。將に動變せんと欲すれば、必ず先づ志を養ひ、意を伏して以て間を視る。其の實を固くするを知る者は、自ら養へばなり。己を讓る者は、人を養へばなり。故に神、存し、兵、亡び、乃ち之が形勢を為す。

55

分威法伏熊（威を分ち、本来的な心のはたらきによる影響力を行使し、主体性を貫徹するには伏熊に法る）

威を分ち、主体を貫徹するというのは、「神」（上位自我）の「伏」（反射である。）それ故に、意（氣持ち）を冷静にし、志（意志）を強固にし、その結果「神」がその舍たる心に帰一すれば、「威覆」（エゴを破る心のはたらきの「神」からの反射。要するに、自己の利害損得を以ってしては動かし難い影響力。）は盛大である。この「威覆」が

盛大であれば、心の内は、ことばが本来的心に基く確信に一致し、「実」であり、堅固である。心の内が「実」であり堅固であれば、これに匹敵相当するものはなく、主体が確立される。これに匹敵相当するものがなく、主体が確立されれば、人行使する「威」（影響力）によってその形勢を存在の前提としての天のように自然に主体的に動かすことができる。この「実」（ことばに主体的裏打ちのある状態）によって「虚」（ことばだけで中味がない。つまり他から与えられたことばによって自分を位置づける非主体的状態）を取り扱い、有（力）を以って無（力）を取り扱うことは、鑑（二十四×二十銖）の重みで銖を量る様なものであり、自由自在に位置づけられる。

それ故に、行動したことに、人は必ず従い、唱えたことには、人は必ず同調する。だから、指一本を曲げて見せるというような、わずかな動作をして見せ、そのことが他に与えてゆく影響を観察し、読み取り、行動を起し状態を変化させ、一つの形として具体化して示したなら、誰も足を引つ張れる者はない。

だから、「唱和」、何か唱えたときに、どう調和してくるか、を詳らかにつかみ取り、相手の間隙、すきによってその心の隙間にこちらの、心よりすることば、行動を示したなら、こちらの起した行動の変化は明らかかなものとな

り、その影響力を行使して主体を貫徹できるのである。だから、行動を起し、状態を変化させようとするなら、必ず先ずその「志」を養い（前出）、こちらの意（気持ち）を伏せて、相手の心の隙、つまり、考えがはつきりせず迷ったり気づかずにいるところを観察するのである。

自らの「実」（ことばが本来的心に基き一致している状態）を堅固にする意味がわかるのは、自らその「志」を養うからである。己を譲り、我に執着しないのは、そのようなあり方を示し、人の志を養い、己を通じて示されるその本来的な心に人々を一体化させようとするためなのである。それ故に、神（上位自我）は自他の心に存在し、兵は滅び、混乱は収束し、そこで結果として、その形勢、秩序が成り立つのである。

55

35 精虚動物、謂之威。發近震遠、謂之分。熊之搏擊、必先伏而後動。故分威法伏能也。

36 覆、猶衣被也。神明衣被、然後其威可分也。

37 言致神之道、必須靜意固志、自歸其舍、則神之威、覆隆盛矣。舍者、志意之宅也。

38 外威既盛、則內志堅實、表裏相副、誰敢當之。物不能當之、

則我之威分矣。威分勢動、則物皆肅然、畏敬其人若天也。

39 言威勢既盛、人物肅然。是我實有而彼虛無。故能以我實取彼虛、以我有取彼無。其取之也、動必相應、猶稱錙以威錙也。二十四銖爲兩、二十四兩爲鎰也。

40 言威分勢震、羣物猶風。故能動必有隨唱、必有和。但撓其指以名呼之、則群物畢至。然徐徐以次觀其餘衆、隨性安之、各令得所。於是風以動之、變以化之、猶尼之在鈞、群器之形自見。如此則天下樂推而不厭、誰能間之也。

41 言審識唱和之理。故能有間必知。我既知間、故能見間。而既見間、即莫能見。故能明於動變而威可分也。

42 既能養志伏意、視之其間、則變動之術、可成矣。

43 謂自知志意固實者。此可以自養也。能行禮讓於己者、乃可以養人也。如此、則神存於內、兵亡於外、乃可爲之形勢也。

散勢法鷺鳥⁴⁴

散勢者、神之使也⁴⁵。用之必循間而動⁴⁶。威肅內盛、推間而行之、則勢散⁴⁷。夫散勢者、心虛志溢⁴⁸。意衰威失、推

精神不專、其言外而多變⁴⁹。故觀其志爲度數、乃以揣說圖事、盡圓方、齊長短⁵⁰。無間則不散。勢者、待間而動。動而勢分矣⁵¹。故善思間者、必內精五氣、外視虛實、動而不失分散之實⁵²。動則隨其志意、知其計謀⁵³。勢者、利害之決、權變之威。勢敗者不以神肅察也⁵⁴。

◎「衰」、「失」道藏本「失」、「勢」に作る。嘉慶十年本によつて改める。◎「間」、「而」道藏本欠。嘉慶十年本によつて補う。◎「則不散。勢者」、「道藏本「則不散勢散勢者」に作る。「散勢」の二字衍。嘉慶十年本によつて削る。

勢を散ずるは鷺鳥^{しやう}に法る

勢を散ずるは、神の使なり。之を用ふる、必ず間に循ひて動く。威、肅として内に盛にして、間を推して之を行はば、則ち勢散ず。夫れ勢を散ずる者は、心、虚にして志、溢る。意、衰へ威失はれ、精神、専ならざれば、其の言、外にして変多し。故にその志を觀て度数と爲し、乃ち以て説を揣し事を図り、円方を尽し、長短を齊す。間、無くんば則ち散ぜず。勢は、間を待ちて動く。動かば^{すなは}而ち勢、分たる。故に善く間を思ふ者は、必ず内、五氣を精にし、外、虚実を視、動きて分散の実を失はず。動かば則ち其の志意に随ひ、其の計謀を知る。勢は利害

の決、權變の威なり。勢、敗るる者は神を以て肅察せざるなり。

56

散勢法鷺鳥（「勢」、威の陽、積極的かたち、迫力、現実改変

能力を散じ行使するには鷺鳥に法る）

「勢」を散じ迫力を行使し、情況を決するのは、「神」（上位自我）の使、積極的現れである。これを用いる場合は、必ず「間」に循い、相手の心の隙間、決断されず、判断に迷っていたり、考えの及んでいないところを目安にして動くのである。「威」が引き締まった形で肅然として心の内に盛んに反射した状態で、相手の心の隙間、たかくくって自己に安住しているような部分を推し量り、これを行使すれば、その「勢」は散じ、効果を挙げる。

そもそも「勢」を散ずるといふのは、心が己にとらわれず虚であり、「神」に基く「志」が満ち溢れたあり方なのである。「意」（気持ち）が衰え、「威」が失われ、「精神」（精鋭なる「神」）が専一でなければ、その人のことばは的外れで、主体性なく変化が多い。それ故に、相手の「志」を観察して、それを基準、目安とし、そこで相手の説、言っていることを揣し探りを入れて推し量り、行うべきことを図り計画し、円方を尽して可能性を確かめ、長短を

斉えてバランスをはかる。

だが、「間」、相手の心の隙間がなければ、散ぜず、行使しない。「勢」は「間」を前提に動くものである。動けばそこで「勢」が分たれ行使される。それ故に、「間」についてよく思いを馳せる者は、必ず心の内では五気を精鋭にし、身の外、対外的には虚実、真偽、つまり相手が本来の心によるものかどうかを観察して行動すれば、その「分散の実」、実効性を失ったりしない。動けばその自らの意思に従い、結果、自らが何を計画すべきか自ずからわかる。「勢」は、「利害の決」、存在可能性の決定要因であり、「權變の威」、現実価値改変可能性の動かし難い本来の根拠である。「勢」が敗れ、駄目になるのは、「神」（上位自我）によつて嚴肅に考察しないからである。

56

44 勢散而物服。猶鳥擊禽獲。故散勢法鷺鳥也。

45 勢由神發。故勢者神之使也。

46 無間則勢不行。故用之、必循間而動。

47 言威勢内盛、行之、又因間而發、則其勢自然而散矣。

48 心虚則物無不包、志溢則事無不決。所以能其勢。

49 志意衰微而失勢、精神挫衄而不專、則言疏外而譎變。

50 知其志意隆替、然後爲之度數。度數既立、乃循撫而說之。其
圖事也、必盡圓方之理、齊短長之用也。

51 散不得間、則勢不行。故散勢者、待間而動。動而得間、勢自
分矣。

52 五氣內精、然後可以外察虛實之理。虛實之理、不失則間必可
知。有間必知、故能不失分散之實也。

53 計謀者、志意之所成。故隨其志意、必知其計謀也。

54 神不肅察、所以勢敗也。

轉圓法猛獸⁵⁵

轉圓者、無窮之計也。無窮者、必有聖人之心、以原不
測之智、以不測之智而通心術⁵⁶、而神道混沌爲一。以變論
萬類、說義無窮⁵⁷。智略計謀、各有形容。或圓、或方、或
陰、或陽、或吉、或凶、事類不同⁵⁸。故聖人懷此之用、轉
圓而求其合⁵⁹。故造化者爲始、動作無不包、大道以觀神
明之域⁶⁰。天地無極、人事無窮、各以成其類。見其計謀、
必知其吉凶成敗之所終也⁶¹。轉圓者、或轉而吉、或轉而凶。
聖人以道先之存亡、乃之轉圓而從方⁶²。圓者、所以合語。

方者、所以錯事。轉化者、所以觀計謀、接物者、所以觀
進退之意⁶³。皆見其會、乃爲要結、以接其說也⁶⁴。

◎「也」、道藏本欠。嘉慶十年本によつて補う。◎「以變論

萬類、說義無窮⁵⁷。」、道藏本「以變論萬類義、說義無窮」に
作る。「義」の字衍。嘉慶十年本によつて削る。◎「與」、

道藏本「興」に作る。嘉慶十年本によつて改める。

転円は猛獸に法る

転円は、無窮の計なり。無窮なる者は、必ず聖人の心
有りて、以て不測の智に原き不測の智を以て心術に通ず
れば、而ち神、道、混沌として一と爲る。変を以て萬類
を論じ、義を説きて窮る無し。智略、計謀、各々形容有
り。或は円、或は方、或は陰、或は陽、或は吉、或は凶、
事類、同じからず。故に聖人は此の用を懷ひ、転円して
其の合を求む。故に造化なる者と始を爲さば、動作は包
まざる無く、大道、以て神明の域を觀る。天地は無極、
人事は無窮、各々以て其の類を爲す。其の計謀を見れば、
必ず其の吉凶成敗の終る所を知るなり。転円は、或は転
じて吉、或は転じて凶なり。聖人は道を以て先づ存亡を
知り、乃ち円を転じて方に從ふを知る。円とは、語を合
する所以、方とは事を錯く所以なり。転化とは、計謀を

観る所以、接物とは、進退の意を観る所以なり。皆、其の会を見て、乃ち要結と爲し、以て其の説に接するなり。

57

転円法猛獣（「転円」、丸いものを転がすように対応するには猛獣に法る）

「転円」は無窮の計、無限に対応する方法である。無窮というものは、必ず聖人の心（本来の心に基きあるべくあることを自覚した状態）があつて、「不測の智」、我を立てて測らないという智、見識によつて、「心術」（前出、『盛神法五龍』、心の扱い方）に通曉すれば、「神」（上位自我）、「道」（ことば）は渾然一体、心よりすることばそのもののあり方となる。そこで、変化によつて万類、個別具体のものを論じ、価値付け、「義」、あるべきあり方を説いて窮まることがないのである。

知略、計謀、構想や計画には、それぞれにそのかたち、イメージというものがある。「円」、柔軟性ある丸いイメージのものだったり、「方」、角張った対立する可能性のあるものだったり、「陰」、秘密を要するものだったり、「陽」、周知させる性質のものだったり、「吉」、そのものを伸ばすようなものだったり、「凶」、そのものを消滅さ

せるものだったりであり、事としての分類は同じではないのである。それ故に聖人は、この用い方を考え、転円し、丸いものを転がすように無限に対応して、その相手、現実に相応しいものを求める。

それ故に、「造化」、現象を生み出し続ける変化そのものの、本来の心と同一の主体に一体化し、そこを始め、原点とするならば、その行動、あり方は、「造化」によつて生み出されたもの、つまり万物を包含し、その範囲に収めないものはなく、「大道」、大いなる本来のことばそのもので、そこで、「神明の域」、本来の心の現れである上位自我の明らかに示された世界を見ることになる。

天地は、何処でも中心であるように見えるが、何処にもこれが中心、極だとする点は示し得ず無極であり、従つて、人事は極まりなく変化し続け、おのおのそこでその同一パターンがある場合それに従い、その類、グループを形成する。だから、その計謀、計画を見れば、必ずその事の発展消滅、成功失敗の行き着くところがわかるのである。「転円」は、これがある時には「吉」、発展性あるものに転じたり、「凶」、消滅する方向へと転じたりするのである。

聖人は、「道」（ことば）によつて先ずその事の存亡、可能性を知り、そこで円を転じて方に従う。つまり、対

応から決断に到ることを知るのである。「円」とは、相手と語るものを合わせるための方法であり、「方」とは、その事を決断するための根拠である。「転化」とは、計謀、計画の可能性を観察するためのあり方であり、「接物」、外物（我以外の現象）に接し関係するのは、「進退の意」、進むか退くかの意志を観察するためである。すべてその「会」、ぴったりくるところを見て、そこで「要結」、押さえるべきポイントとして、そのことによつてその説、考え方に接し関係するのである。

57

55 言聖智之不窮、若轉圓之無止。轉圓之無止、猶獸威無盡。故轉圓法猛獸也。

56 聖心若鏡、物感斯應。故不測之智、可原、心術之要可通也。

57 既以聖心原不測、通心術。故雖神道混沌、妙物杳冥、而能論萬物之變、說無窮之義也。

58 事至、然後謀興。謀興、然後事濟。事無常理。故形容不同。圓者通而無窮。方者止而有分。陰則潛謀未兆。陽則功用斯動。動。吉則福至、凶則禍來。凡此事皆反覆。故曰、事類不同也。

59 此爲所謀圓方以下六事、既有不同。或多乖謬。故聖人懷轉圓

之思、以求順通合也。

60 聖人體道以爲用。其動也神、其隨也天。故圓造化。其初動作、先合大道之理、以稽神明之域。神道不違、然後發施號令。

61 天地則獨長且久、故無極。人事則吉凶相生、故無窮。天地以日月不過、陵谷不遷爲成。人事以長保元亨、考終厥命爲成。故見其事之成否、則知其計謀之得失、知其計謀之得失、則吉凶成敗之所終、皆可知也。

62 言吉凶無常理。故取類轉圓。然唯聖人坐忘遺鑒、體同乎道。故能先知存亡之所在、乃後轉圓而從其方、棄凶而趨吉。方謂存亡之所在也。

63 圓者、通變不窮、故能合彼此之語。方者、分位斯定。故可以錯有爲之事。轉化者、改禍爲福。故可以觀計謀之得失。接物者、順通人情。故可以觀進退之意、是非之事也。

64 謂上四者、必見會通之變、然後總其綱要而結之、則情僞之說、可接引而盡矣。

損兌法靈著⁶⁵

損兌者、幾危之決也⁶⁶。事有適然、物有成敗。幾危之動、不可不察⁶⁷。故聖人以無爲待有德、言察辭、合於事⁶⁸。兌者知之也。損者行之也。損之、說之、物有不可者、聖人不爲⁶⁹辭也⁷⁰。故智者不以言失人之言。故辭不煩而心不慮、志不亂而意不邪⁷¹。當其難易而後爲之謀、^因自然之道以爲實⁷²。圓者不行、方者不止、是謂大功。益之、損之、皆爲之辭⁷³。用分威散勢之權、以見其兌威、其機危、乃爲之決⁷⁴。故善損兌者、譬若決水於千仞之堤、轉圓石於萬仞之谿。而能⁷⁵行此者、形勢不得不然也⁷⁵。

58

◎「^レ因」、道藏本欠。嘉慶十年本によって補う。◎「慮」、道藏本「虛」に作る。皆川氏校刻本に従って改める。◎「而能行此者、形勢不得不然也⁷⁵」、道藏本欠。嘉慶十年本によって補う。

損兌は靈著に法る

損兌とは、幾危の決なり。事に適然有り、物に成敗有り。幾危の動、察せざるべからず。故に聖人は無爲を以て有徳を待ち、言は辞を察し、事に合す。兌とは之を知るなり。損とは之を行ふなり。之を損し之を説くに、物に可ならざる者有らば、聖人は之が辞を爲さず。故に智者は言を以て人の言を失はず。故に辞は煩ならずして心

は慮らず、志は乱れずして意は邪ならず。其の難易に當りて後に之が謀を爲し、自然の道に因りて以て実を爲す。円者は行かず、方者は止らず、是を大功と謂ふ。之を益し、之を損するは、皆、之が辞を爲す。分威散勢の権を用ひ、以て其の兌威を見し、其の機危は、乃ち之が決を爲す。故に善く損兌する者は、譬ふれば、水を千仞の堤に決し、石を萬仞の谿に転円するが若し。而して能く此を行ふ者は、形勢、然らざるを得ざればなり。

58

損兌法靈著（決断実行と状況判断は靈著、めどきに法る）

「損兌」とは、「幾危の決」（危機の到来のかすかな兆し）、不安材料への決断である。物事には、まさにぴつたりというかたがりがあり、成敗の押さえどころというものがある。微かな危機への動きは、洞察しなければならぬ。それ故に聖人は、己にとらわれることのない無為のあり方で、有徳の人、本来的心のはたらきに從って対応し得る人待ち、相手の言うことは、その言辞が、どのような立場から何を指してそういうのかを推察し、その事柄に合わせてみるのである。「兌」とは、その事を知ること、状況の判断である。「損」とは、これを行うこと、決断実行である。何事かを決断実行し、何事かを言葉に

して説得するときに、できないものがあるならば、聖人はそれについて言辭を弄する事はない。それ故に、智者は、できもしないことを言つて、人の実行可能な言葉を失うようなことはしない。それ故に、その言辭は煩雜にならず、心は余計なことを慮らず、意志は乱れず、その氣持ちは我の立場に執着して邪惡になるということがない。その事柄の難易に具體的に当たつてから、それについての謀、計画をし、自然の道、本来的な心よりすることばに従つて、それに相應しい実、具體的内容を規定する。円なる者、丸い言葉、人と合わせる様な言葉は、実行されるものではなく、方なる者、角張つた言葉、こうだと決する言葉は、次の状態へと移り実行され、止まるものではない。これを「大功」、自然の道、ことばの太いなるはたらきと言う。だから、その事を「益」し「兌」に同じ)、知つて状況判断すること、その事を「損」し、決断実行するというのは、いずれもその言辭、言葉として具体化することなのである。そこで、「分威散勢の權」(どのようになれば影響力、「威」がはたらき、「勢」を散ずる、実際に改変できるかをかり考えること)を用い、それによつて、その「兌威」、説得力ある状況判断の言葉を示し、その事の「機危」、不安材料については、決断の言葉を示すのである。それ故に、巧みに「損兌」し、

状況判断、決断実行する者は、譬えてみれば、千仞の高さもある堤を一氣に切り落とし、石を万仞の深さの谷へと転がし落とすようなものである。そして、このようにできるといふのは、形勢、その事のありようが、そうならざるを得ない自然の理に従つたものだからなのである。

58

65 老子曰、塞其兌。河上公曰、兌、目也。莊子曰、心有眼。然則兌者謂以心眼察理也。損者、謂減損他慮專以心察也。兌能知得失、著能知休咎。故損兌法靈著也。

66 幾危之理、兆動之微、非心眼莫能察見。故曰、損兌者、幾危之決也。

67 適然者、有時而然也。物之成敗、有時而然。幾危之動、自微至著。若非借遠深知機玄覽、則不能知於未兆、察於未形。使風濤潛駭、危機密發、然後河海之量堙爲窮流、一簣之積、疊成山嶽。不謀其始、雖悔何追。故曰、不可不察。

68 夫聖人者、勤於求賢、密於任使。故端拱無爲以待有德之士。士之至也、必敷奏以言。故曰、言察辭也。又當明試以功。故曰、合於事也。

69 用其心眼、故能知之。減損他慮、故能行之。

70 言減損之說、及其所說之物理有不可、聖人^レ不^レ生辭以論之也。

71 知者聽於人之訴、采芻蕘之言、雖復辨周萬物、不自說也。故不以己能言而棄人之言。既用衆言、故辭當而不煩、還任衆心、故心誠而不偽。心誠言當、志意豈復亂邪哉。

72 夫事變而後謀生、改常而後計起。故心當其難易之際、然後爲之謀。謀失自然之道、則事廢而功虧。故必因自然之道、以爲用謀之實也。

73 夫謀之妙者、必能轉禍爲福、因敗成功、用彼而成我也。彼用圓者謀令不行、彼用方者謀令不止。然則圓行方止、理之常也。我謀既發、彼不得守其常。豈非大功哉。至於謀之損益、皆爲生辭以論其得失也。

74 所以能分威散勢者、心眼之由也。心眼既明、機危之威可知之矣。既知之、然後能決之。

75 言善損慮以專心眼者、見事審得理明、意決而不疑、志雄而不滯、其猶決水轉石。誰能當禦哉。

持樞！

持樞者、謂春生、夏長、秋收、冬藏。天之正也。不可干而逆之。逆之者、雖成必敗³。故人君亦有天樞生養成藏⁴。亦不可干而逆之。逆之者、雖盛必衰。此天道人君之大綱也⁵。

◎「亦不可干而逆之」、道藏本「亦復不別干而逆之」に作る。
「復」の字衍。「別」の字訛字。嘉慶十年本によつて改める。
◎「者」、道藏本欠。嘉慶十年本によつて補う。

持樞

樞を持すとは、春、生じ、夏、長じ、秋、收め、冬、藏す、天の正を謂ふなり。干して之に逆ふべからず。之に逆ふ者は、成ると雖も必ず敗る。故に人君も亦、天樞の生、養、成、藏する有り。亦、干して之に逆ふべからず。之に逆ふ者は、盛なりと雖も必ず衰ふ。此れ天道、人君の大綱なり。

59

持樞

「樞を持す」、とぼそ、中心に當るあり方を保持するとは、春に生じ、夏に長じ、秋に收め、冬に藏するように、「天の正」、現象の本来あるべき流れのことをいうのである

る。背いてこれに逆らうことはできない。これに逆らうものは、完成したとしても、必ずだめになる。それ故に、君主にも亦、「天枢」（現象の流れの根本）に生、長、収、藏があるのと同じ方がある。そして、同様にこれに逆らうことはできない。これに逆らうものは、たとえ盛んだったとしても、必ず衰えるものである。これが「天道、人君の大綱」、現象のあり方を示す言葉と君主の大本である。

59

1 樞者居中、以運外。處近而制遠、主於轉動者也。故天之北辰、謂之天樞。門之運轉者、謂之戶樞。然則持樞者、執運動之柄以制物者也。

2 言春夏秋冬四時運行、不爲而自然也。不爲而自然、所以爲正也。

3 言理所必有物之自然、靜而順之、則四時行焉、萬物生焉。若乃干其時令逆其氣候、成者猶敗。況未成者乎。元亮曰、含氣之類、順之必悅、逆之必怒。況天爲萬物之尊而逆之乎。

4 言人君法天以運動。故曰、亦有天樞。然其生養成藏、天道之行也。人事之正、亦復不別耳。

5 言千天之行、逆人之正、所謂倒置之。故曰、逆非衰而何。此

持樞之術、恨太簡促、暢理不盡。或篇脫爛、本不能全故也。

中經一

中經、謂振窮趨急、施之。能言厚德之人、救拘執、窮者不忘恩也²。能言者、儔善博惠³、施德者、依道⁴。而救拘執者、養使小人⁵。蓋士、當世異時、或當因免填坑、或當伐害能言、或當破德爲雄、或當抑拘成罪、或當戚戚自善、或當敗敗自立⁶。故道貴制人、不貴制於人也。制人者握權、制於人者失命⁷。是以見形爲容、象體爲貌、聞聲和音、解仇鬪鄰、綴去、却語、攝心、守義⁸。

本經記事者、紀道數、其變要在持樞、中經⁹。

60

◎「拘」、道藏本「物」に作る。嘉慶十年本及び陶宏景注によつて改める。◎「填」、道藏本「園」に作る。同義。

中經

「中經」は、窮を振ひ急に趨き、之を施すを謂ふ。能言、厚德の人、拘執を救はば、窮者は恩を忘れず。能言者は、善に儔し博く恵み、施德者は、道に依る。而して拘執を救ふとは小人を養使するなり。蓋し士、世に当りては時を異にし、或は困りて填坑を免るるに当り、或は能言を伐害するに当り、或は徳を破りて雄と爲るに当り、

或は抑拘せられて罪を成すに当り、或は威威として自ら善くするに当り、或は敗を敗として自立するに当る。故に道は人を制するを貴び、人に制せらるるを貴ばず。人を制する者は權を握り、人に制せらるる者は命を失ふ。是を以て「見形為容、象体為貌」、「聞声知音」、「解仇鬪郅」、「綴去」、「卻語」、「損心」、「守義」あり。

「本經」の記事は、道数を紀し、其の変要は「持枢」、「中經」に在り。

60

中經

中經には、困窮を救い、緊急に應じて、これを施すことが述べられている。

「能言、厚德の人」（相応しい言葉を生み出せる人、充分に本来の心の声に従つてある人）が、これにより「拘執」、とらわれた状態を救つたなら、追ひ詰められていた者は、その恩を忘れないであらう。「能言」の人は、善、妥当性あるものに一体化し、味方し、博く恵み与え、「施徳」の人、徳を施し、本来的な心のあり様を示し、人をそこに一体化させようとする厚德の人は、「道」（本来的なものに基くことば）によるのである。そして、「拘執」、とらわれた状態を救うというのは、エゴに基いて生きる

しかない小人を養い安心させ、相応しく使い、仕事を与えて充実させるのである。

思うに、士、然るべき人物は、現実世界では、それぞれ異なつた時代にあつて、或いは危うく戦乱による横死を免れたり、小人輩が「能言」の人を憎み害する時勢にあつたり、人の心に基く本来のあり方を価値とする「徳」が否定され、力が支配するような時にあつたり、弾圧され、捕われて罪人に仕立てられたり、世を憂え、一人、身の善なるあり方を保つ事になつたり、時に適合しなくなつた既成の価値観への執着を越え、あるべくあるあり方を確立し示すことにより、自立するような事にもなるものである。

それ故に、「道」（ことば）は、人を制し主体を保つ事を貴ぶのであり、人に制せられることは、貴ばないものである。人を制する者は、「權」、価値付けのはかりを握り、人に制せられる者は、「命」、その本来のあるべきあり方を失うのである。

だから、以下に述べる「見形為容、象体為貌」、「聞声知音」、「解仇鬪郅」、「綴去」、「却語」、「損心」、「守義」の説があるのである。

『本經（陰符七術）』の記事は、「道数」（ことばのことわり）を記したものであり、その変化対応の要点は、『持

枢』、『中經』に述べられている。

60

1 謂由中以經外、發於本以彌縫於物者也。故曰、中經。

2 振、起也。趨、向也。物有窮急、當振起而向護之。及其施之、

必在能言之士、厚德之人。若能救彼拘執、則窮者懷德、終不忘恩也。

3 儔、類也。謂能言之士、解紛救難。不失善人之類而能博行恩

惠也。

4 言施得之人勤能循理、所爲不失道也。

5 言小人在拘執而能救養之、則小人可得而使也。

6 圜坑、謂將有兵難轉死溝壑。士或有所因而能免斯禍者。伐害

能言、謂小人之道長譏人罔極。故能言之士、多被數害。破德

爲雄、謂毀文德崇兵戰。抑拘成罪、謂賢人不羣橫被縲絏。威

威自善、謂天下蕩蕩、無復綱紀而賢者守死善道、真心不踰。

所謂歲寒、然後知松柏之後彫、風雨如晦、鸛鳴不已者也。敗

敗自立、謂天未悔禍、危敗相仍、君子窮而必通、終能自立、

若管仲者也。

7 貴有術而制人、不貴無術而爲人所制者也。

8 此總其目、下別序之。

9 此總言本經、持樞、中經之義。言本經紀事、但紀道術而已。至於權通之要、乃在持樞、中經也。

見形爲容、象體爲貌者、謂文爲之生也¹⁰。可以影響形容象貌而得之也¹¹。有守之人、目不視非、耳不聽邪、言必詩書、行不淫僻、以道爲形、以德爲容。貌莊色溫、不可象貌而得之。如是隱情塞郅而去之¹²。

聞聲和音者、謂聲氣不同、則恩愛不接。故商角不二合、徵羽不相配¹³。能爲四聲主者、其唯宮乎¹⁴。故音不和、則悲。是以聲散傷醜害者、言必逆於耳也¹⁵。雖有美行盛譽、不可比目合翼相須也。此乃氣不合、音不調者也¹⁶。

61

◎「行不淫僻」道藏本「行不僻淫」に作る。嘉慶十年本に従つて改める。◎「德」、「之」、「愛」、道藏本「聽」、「也」、「受」、に作る。嘉慶十年本に従つて改める。◎「者」、道藏本欠。嘉慶十年本によつて補う。◎「則悲、是以」、道藏本「則不悲不是以」に作る。二字の「不」字衍。嘉慶十年本に従つて削る。

「形を見し容と爲し、体に象りて貌と爲す」とは、文、之が爲に生ずるを謂ふ。影響、形容、象貌を以て之を得

べきなり。有守の人、目は非を視ず、耳は邪を聴かず、言は必ず詩書、行は淫僻ならず、道を以て形と為し、徳を以て容と為す。貌、莊にして、色、温なれば、象視して之を得べからず。是の如くんば情を隠し、^{びき}郤を塞ぎて之を去る。

「声を聞き音を和す」とは、声氣、同じからざれば、則ち恩愛接せざるを謂ふ。故に商、角は二つながら合せず、徵、羽は相ひ配せず、能く四声の主為る者は、其れ唯だ宮か。故に音、和せずんば、則ち悲なり。是れ声を以て散傷醜害する者にして、言、必ず耳に逆らふ。美行、盛譽有りと雖も、比目、合翼の相ひ須^まつべからざるなり。此れ乃ち氣、合せず、音、調はざる者なり。

61

「見形為容、象体為貌」（形を見し容と為し、体に象りて貌と為す）

「外形を現し内容とし、本体に象つて容貌とする。」とは、『易』の爻がこれにより生ずる、つまり、類推し得るイメージが生ずることを言う。即ち、その人物の「影響」（様子、応対）、「形容」（態度、物腰）、「象貌」（容貌、雰囲氣）によって、その人の意向、心理をつかむことができるのである。「有守の人」、節操のある人は、相応し

くない行いや物事、人物に目を向けず、よこしまな考え、言説には耳を貸さず、その発言は、必ず『詩経』、『書経』に適った、人の基くべきものに基いたものであり、その行動は、勝手に賤しいところがなく、「道」（心よりすることば）を法るべき形とし、「徳」（本来的な心のはたらき）をその内容として身を処している。要望は莊重であり、表情は温和であるから、その様子から推察して、その意向、心理をつかむ事はできない。この様であれば、「情」（本音）を隠し、心の隙間を塞ぎ、相手に主体性を奪われることなく、相手の意図を排除するのである。

「聞声知音」（声を聞き、音を和す）とは、発言する声、ことばの端々に見え隠れするその人の氣質が同質でなければ、心のつながり、恩愛が触れ合うことはないのを言うのである。それ故に、音楽という「商」、「角」の音は、二つではハーモニー、調和することはなく、「徵」、「羽」の音は並べて奏する事はないのであり、この四つの音の中心となることのできるものは、やはり「宮」だけである。それ故に、音が調和しないなら、悲鳴である。これが声で「散傷醜害」するもの、気を散らせ損ない不快を与え害するものであり、その言う言葉は、必ず相手の耳に逆らう。優れた行い、立派な評価があつても、「比目の魚、合翼の鳥」といった一心同体の関わりを期待はできないの

である。これが、つまり、氣が合致せず、音が調和しないということである。 61

10 見彼形、象其體、即知其容貌者、謂用爻卦占卜而知之也。

11 爲彼人之無守、故可以影響形容相貌占而得之。

12 有守之人、動皆正直、舉無^{〔〕}僻、^{〔〕}昌^{〔〕}盛、^{〔〕}耀光日新、雖有辯士之舌、無從而發。故隱情塞^{〔〕}鄒閉藏而去之。

13 商金、角木、徵火、羽水、遞相克食、性氣不同、故不相配合也。

14 宮則土也。土主四季。四者由之以生。故^{〔〕}能爲四聲^{〔〕}之主也。

15 散傷醜害、不和之音、音氣不和、必與彼乖。故^{〔〕}其言^{〔〕}、必逆於耳。

16 言若音氣乖彼、雖行譽美盛、非彼所好、則不可如比目之魚、合翼之鳥兩相須也。其有能令兩相求應、不與同氣者也。

解仇鬪鄒、謂解羸微之仇、鬪鄒者。鬪強也¹⁷。強鄒既鬪、稱勝者高其功、盛其勢也¹⁸。弱者哀其負、傷其卑、^{〔〕}汗其名、恥其宗¹⁹。故勝者^{〔〕}其功勢、苟進而不知退²⁰。弱者聞哀其負見其傷、則强大力倍、死而是也²¹。鄒無^{〔〕}強大、禦無强大、則皆可脅而并²²。

綴去者、謂綴己之繫言、使有餘思也²³。故接貞信者、

稱其行、厲其志、言可爲、可復、會之期喜²⁴。以他人之庶、引驗以結往、明^{〔〕}歎^{〔〕}而去之²⁵。 62

◎「汗」、「聞」、「強」、「歎歎」、道藏本「行」、「鬪」、「極」、「疑疑」に作る。嘉慶十年本に従つて改める。

「仇の鄒^{げき}を鬪はすを解く」とは、羸^{るゐび}微の仇の鄒を鬪はすを解くを謂ふ。鬪は強なり。鄒に強め、既に鬪ふに、勝者の其の功を高くし、其の勢を盛にするを称するや、弱者は其の負くるを哀み、其の卑を傷み、其の名を汗^をとし、其の宗に恥づ。故に勝者は、其の功、勢を聞きては、苟も進みて退くを知らず。弱者は其の負くるを哀れみ其の傷むを見ると聞かば、則ち大なるに強め、力め倍^まし、死するも是とするなり。鄒あるも大に強むる無く、禦るも大に強むる無くんば、則ち皆、脅^{おほ}して并^{あは}すべし。

「去るに綴^{てい}す」とは、己の繫言を綴して、餘思有らしむるを謂ふなり。故に貞信者に接すれば其の行を称し、その志を厲^{はげま}し、為すべく、復すべく、之に会せば喜を期すと言ふ。他人の庶^{ちか}きを以て引驗して以て往を結び、明らか^{くわんぶん}にすること歎^{くわんぶん}歎^{くわんぶん}にして之を去る。 62

「解仇鬪鄒」（仇の鬪鄒するを解く）とは、仇敵同士が、その溝を深め鬪うことを解消することであり、ほんのわ

ずかな敵対関係であるものが、その溝を深め闘うことを解消することを言うのである。

闘とは、強、つとめ、増大させることである。心と心の隙、溝を深め増大させ、闘いだした時に、有力な方が自らの功績を誇り高く掲げ、自らの勢力を盛んに誇示することを称讃したりすれば、弱い方は自らの負けを悲しみ、立場の低さを傷み、その評価を汚れとして憎み、自らの祖先に恥じることになる。それ故に、有力な方は、自らの功績、勢力についての評判を聞くなら、ひたすら進んで争い、退くことを知らないだろうし、弱い方は、自らの負けを悲しみ、自らの負い目を評者が見ていると聞けば、ひっくり返そうと相手以上に大きくなることにつとめ、必死に励み、死んでもよいとまで思うようになるのである。対立する溝があつても、こちらが大きくすることに務めることなく、両者の間に相手から守る立場の隔たりがあつても、こちらが強いて大きくすることがないなら、両者共に不利益を知らせ恐れさせ、溝を埋めて合わせ、丸く収めることができるのである。

「綴去」（去るに綴す）とは、自らの相手の心を繋ぎ止める言葉を綴り示し、去ったあとに、相手にこちらに対する餘思、信頼し得るという思いをもたせることを言う。それ故に、「貞信者」、心が我に歪められず正しく信義あ

る人に接した時は、その行いを評価称讃し、その意志を励ましてやり、実行するのが宜しく、その思うところの本来のあり方に復帰することができ、もしその様になれば、喜ばしいものがあるだろう事を言うのである。他の人の実例で近いものを引いて傍証として過去を結び付け確信させ、誠意を以って明らかにして、その人と別れるのである。

62

17 辨説之道、其猶張弓、高者抑之、下者舉之。故羸微爲仇、從而解之。強者爲郅、從而闘之也。

18 闘而勝者、從而高其功盛其勢也。

19 闘而弱者、從而哀其負劣、傷其卑小、下下其名、恥辱其宗也。

20 知進而不知退、必有亢龍之悔。

21 弱者聞我哀傷、則勉強其力、倍意致死、爲我爲是也。

22 言雖爲郅非能強大、其於扞禦亦非強大、如是者、則以兵威脅令從己而并其國也。

23 緊、屬也。謂已令去而欲緩其所屬之言、令後患而同也。

24 欲令去後有思。故皆貞信之人、稱其行之盛美、厲其志令不怠。

謂此美行必可常爲、必可報復、會通其人、必令至於喜悅者也。

25 言既稱行屬志、令其喜悅、然後以他人庶幾於此^行者、引之以爲成驗以結已往之心、又明己^款誠至誠。如是而去之、必思己^己而不忘也。

〔卻語者、察伺短也。〕²⁶故言多必有數短之處。識其短驗

之²⁷。動以忌諱、示以時禁²⁸、其人因以懷懼。然後結信以安其心、收語蓋藏而卻之²⁹。無見己之所不能於多方之人。

攝心者、逢好學伎術者、則爲之稱遠³¹、方驗之道、驚以

奇怪、人繫其心於己³²。効之於人、驗去亂其前、我歸誠於

己³³。遭淫酒色者、爲之術、音樂動之、以爲必死生日少之

憂³⁴、喜以自所不見之事、終可以觀漫瀾之命、使有後會³⁵。

63

◎二字の「卻」、道藏本「却」に作る。◎「故言多必有數短之處、識其短驗之²⁷」、道藏本は陶宏景注とし、「故」の下

「言」の字を欠く。嘉慶十年本は本文とし、「言」の字有り。

嘉慶十年本に従って本文とする。◎「其人因以懷懼」、道

藏本は陶宏景注とする。嘉慶十年本は本文とし、「其人恐畏」

に作る。本文とする。◎「信」、「道」、「人」、道藏本欠。嘉

慶十年本によって補う。◎「驗去」の上、道藏本「驗」の

字有り。衍。嘉慶十年本に従って削る。◎「淫酒色」、道藏

本「淫色酒」に作る。嘉慶十年本に従って改める。

「卻語」とは、察して短を伺ふなり。故に言、多ければ、必ず數ば短の処有り。其の短を識りて之を驗す。動かすに忌諱を以てし、示すに時禁を以てすれば、其の人、因りて以て懼を懷く。然る後、信を結び以て其の心を安んじ、語を収め蓋藏して之を卻く。己の能はざる所を多方の人に見す無かれ。

「摂心」とは、好みて伎術を学ぶ者に逢はば、則ち之が爲に遠きを称し、方に之を道に驗し、驚かすに奇怪を以てすれば、人、其の心を己に繫ぐ。之を人に效すは、驗して乱を其の前より去り、吾は誠を己に帰す。酒色に淫する者に遭はば、之が術を爲すや、音楽もて之を動かす、以て必ず死し、生くる日少なきの憂を爲し、喜ばすに自ら見ざる所の事を以てすれば、終に以て漫瀾^{まんらん}の命を觀て、後会有ら使むべし。

63

「却語」（言葉退ける）とは、相手を觀察し、短所、通用しないところを伺い知ることである。それ故に、言葉が多ければ、必ずしばしば短、通用しない言辭がある。その通用しないところを知ってつかみ取り、これを相手に確かめる。そして、忌諱（その人の存在根拠に関わる

ようなタブー」で相手の心を動かし、「時禁」（その状況下では危ういこと）を示したなら、その人は自らの発言したことに恐れを懐く。そうした後で、相手に信頼感を与えて心を結びつけることで相手の心を安らかにしてやり、相手に向けた言葉を収め腹にしまつて、こちらが指摘したことを退ける。自らができもしないことを多方面の人に示してはならないのである。

「摂心」（心を執る）とは、学術技芸を好んで学ぶ者に接したなら、その人の為に、それが遠大なものであることを言い、そこでその事が「道」（本来的なことば）に適うものであることを確信させ、常識を超えた驚くべき可能性があることを示したなら、その人はその心をこちらに繋ぎ信頼する。この「摂心」を人に施すには、その事を検証し、その眼前から混乱を取り除き、はっきり確信させ、こちらはその様に誠意を以ってしていることを示すのである。

酒色に溺れる者に接するとき、その術、対応方法としては、音楽によつてその執着を動かし、気をそらせ、そこで、必ず人は死ぬもので、生は限られた日々でしかないものだという心配をして見せ、執着して壁を越えられずにいるその我を誤魔化し悩む状態を絶対とする愚かさ気づかせ、自らは見ようとしなかったその人の可能性

についてのことを指摘して喜ばせたなら、終には、遥かでない「漫瀾の命」（無限の可能性として投げられてあること）に気づき、その後に自らのあるべき立場をつかむことがあるようにさせることができるのである。

63

26 言却語之道、必察伺彼短也。

27 言多不能無短。既察知其短、必記識之、取驗以明也。

28 既驗其短、則以忌諱動之、時禁示之。

29 其人既懷懼、必有求服之情。然後結以誠信以安其懼心、收其向語蓋藏而却之、則其人之恩威固以深矣。

30 既藏向語、又戒之曰、勿於多方人前見其所不能也。

31 欲將攝取彼心、見其好學技術、則爲作聲譽、令遠近知之也。

32 既爲作聲譽、方且以道德驗其技術、又以奇怪從而驚動之。如此則彼人心、繫於己也。

33 人既繫心於己、又効之於時人、驗之於往賢。然後更理其目前所爲、謂之曰、吾所以然者、歸誠於彼人之己。如此則賢人之心可得而攝。亂者、理也。

34 言將欲攝愚人之心、見淫酒色者、爲之術、音樂之可說、又以過於酒色、必之死地、生曰減少、以此可憂之事以感動之也。

35 又以音樂之事、彼所不見者、以喜悅之、言終以可觀、何必淫於酒色。若能好此、則性命漫瀾而無極、然後終會於永年。愚人非可以道勝說、故推音樂可以攝其心。

守義者、謂守以人義、探心在內以合也³⁶。探心、深得其主也。從外制內、事有繫曲而隨之³⁷。故小人比人、則左道而用之、至能敗家、奪國³⁸。非賢智不能守家以義、不能守國以道。聖人所貴道微妙者、誠以其可以轉危爲安、救亡使存也³⁹。

◎「曲」、「之」、道藏本「由」、「也」に作る。嘉慶十年本に従つて改める。

「守義」とは、守るに人の義を以てし、心を探り内に在りて以て合するを謂ふ。心を探るとは、深く其の主を得るなり。外より内を制すれば、事、曲に繋りて之に随ふ有り。故に小人、人に比すれば、則ち左道して之を用ひ、能く家を敗り、国を奪ふに至る。賢智に非ずんば家を守るに義を以てする能はず、国を守るに道を以てする能はず。聖人の、道の微妙なるを貴ぶ所以の者は、誠に

其の以て危を転じて安と爲し、亡を救ひて存せしむべきを以てなり。

「守義」（為すべきことを守る）とは、人として為すべきことを守り、自らの心にその答を問ひかけ、求め探り、その心のうちで為すべきことが心に一致するという確信を得る事を言う。心を探る、自らの心に為すべきことは何かとの答を求め探るとは、深く思索して、その主、主体、つまりこうだという確信を得るのである。外、外界の現象から、内、心を制する、つまり相対的な現象を根拠にして、だからと考えるなら、物事は取り留めなく広がり、無根拠に展開し、それを追い求めるだけということになる。それ故に、小人、エゴイストは、人という外界の現象に自らを比べそれを根拠にする。つまりは、そのエゴを根拠にして「左道」、つまり言葉を本来の心に基いて用いず、自らのエゴを世界の中心と錯覚して、そこを中心にさかさまに用いるので、家という組織をだめにし、国を奪い私物化することができるようになるのである。

「賢智」、本来的な心に基き、己を超えてあるべくあることの価値を知る者でなければ、「義」、人として為すべきことに基いて無私に家を守ることはできず、「道」、心

よりすることばに基いて国家を守護することはできない。
(エゴイストの教条主義など茶番であり、国を盗む事は
できても現実世界に対応して国を守るなどできない
のである。)

聖人が、言葉が微妙であること、つまり、同じ言葉でも何処から言われたのか、エゴに基くものなのか、心に基く本来のものを示しているのかという峻別を貴ぶのは、誠に言葉の、微妙だが決定的な視点のさかさまということが、危険を転換し安泰に、滅亡を救って存続へ、と転換させることができるからなのである。
64

36 義、宜也。宜探其內心、隨其所宜、遂人所欲以合之也。

37 既探知其心、所以得主深也。得心既深、故能從外制内、内由我制、則何事不行。故事有所屬、莫不由曲而隨之也。

38 小人以探心之術來比於君子、必以左道用權。凡事非公正者、皆曰小人、反道亂常、害賢、伐善、所用者左、所違者公。百慶昏亡、萬機曠紊、家破國奪、不亦宜乎。

39 道、謂中經之道也。

鬼谷子 卷下

鬼谷子佚文

轉丸篇『說苑』善說篇、『意林』引用の二条、及び『史記』太史公自序にある引用)

「鬼谷子曰、人之不善而能矯之者、難矣。說之不行、言之不從者、其辯之不明也。既明而不行者、持之不固也。既固而不行者、未中其心之所善也。辯之、明之、持之、固之、又中其心之所善、其言神而珍、白而分、能入於人之心、如此而說不行者、天下夫嘗聞也。此之謂善說。」

『說苑』善說篇第十一

「人動我靜、人言我聽、能固能去、在我而問。知性則寡累、知命則不憂、憂累去則心平、心平而仁義著矣。」

馬總『意林』卷二：

鬼谷子五卷〔樂氏注名壹〕部分所引

「以德養民、猶草木之得時。以仁化人、猶天生草木以雨潤澤之。」

馬總『意林』卷二：

鬼谷子五卷〔樂氏注名壹〕部分所引

「故曰、聖人不朽、時變是守。虛者、道之常也。因者、君之綱也。」

『史記』太史公自序
(司馬貞索隱曰、此出鬼谷子。遷引之以成其章。故稱故曰也。)

◎『說苑』の文は、道藏本『鬼谷子』の内容と整合性がある様であるが、『意林』の二条は「仁義」に基く発想であり、「仁義」をも方法とする考え方とは矛盾するようでもある。

◎その他、『太平御覽』には、次の三条がある。

「鬼谷子曰、事聖君有聽從無諫、事中君有諫諍無諂諛、事暴君有補削無矯拂。」

『太平御覽』卷六百二十治道部一

「鬼谷子曰、君得名則群臣侍之、君失名則群臣欺之。」

同右

「鬼谷子曰、揣情篇云、說王公君長、則審情以說王公、避所短、從所長。」

『太平御覽』卷四百六十二人事部游說下

胠篋篇(『莊子』胠篋篇 第十)

『莊子』と同文につき省略

校訂鬼谷子三卷訳稿終